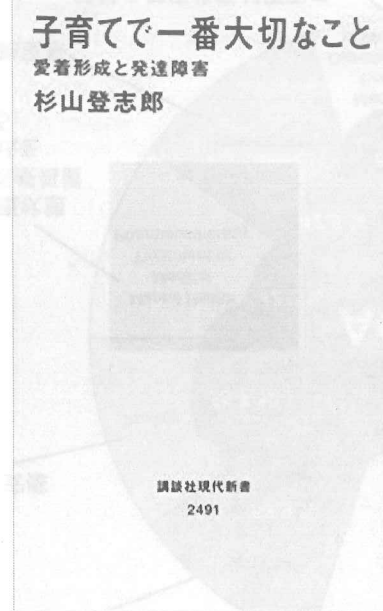




子どもの脳を傷つける親たち

(NHK出版新書 523) 新書 -
2017/8/8

友田 明美 (著)

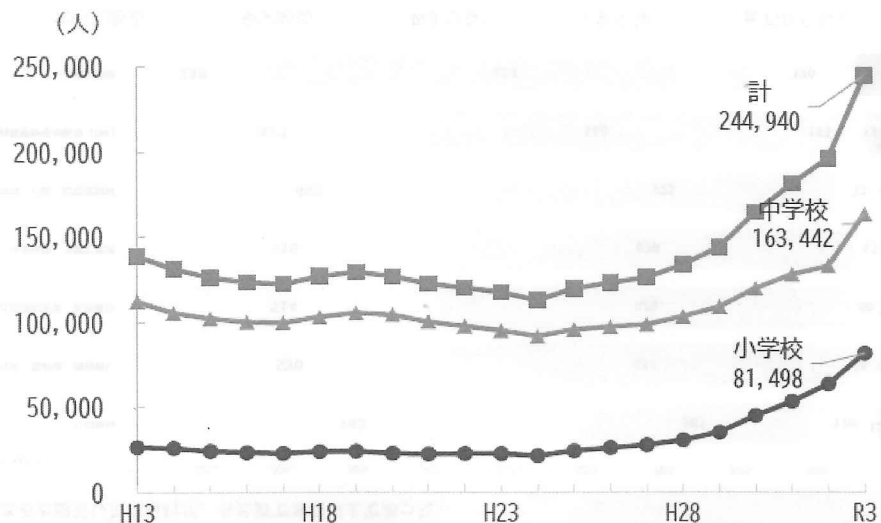


子育てで一番大切なこと
愛着形成と発達障害

(講談社現代新書) 新書 -
2018/9/19

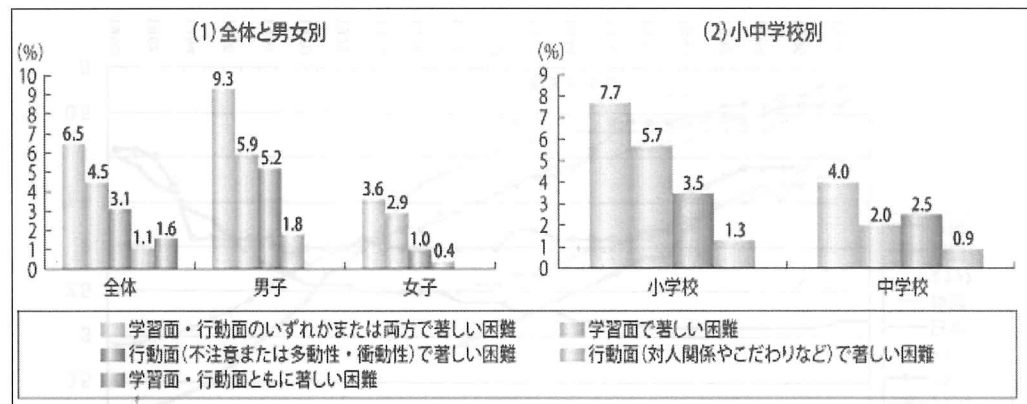
杉山 登志郎 (著)

不登校児童生徒数の推移



出典: 文部科学省 令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要

発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする小学生・中学生



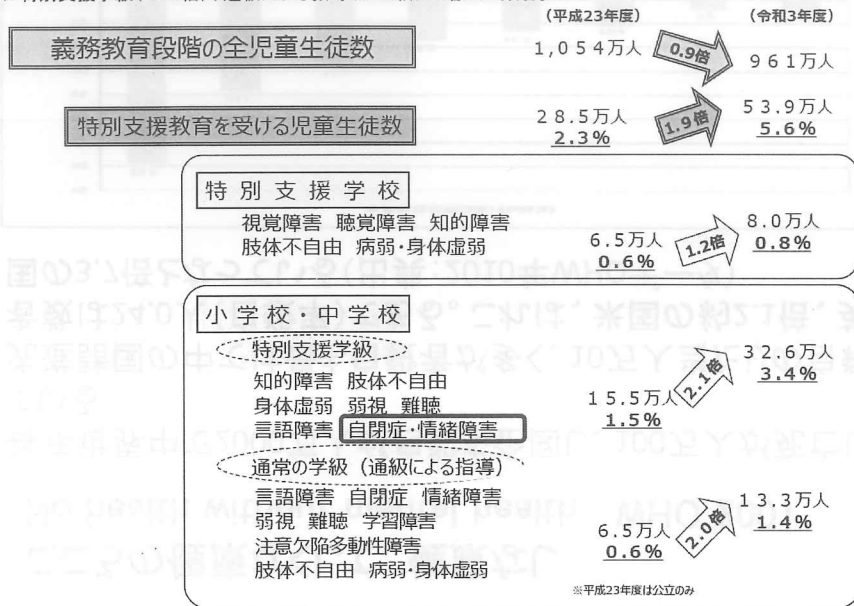
通常の学級に在籍する小学生の7.7%程度、中学生の4.0%程度、小学生・中学生全体の6.5%程度が、知的発達に遅れはないものの学習面・行動面のいずれかまたは両方で著しい困難を示すと推定される。男女別にみると、小中学生男子の9.3%程度、女子の3.6%程度と推定される。

出典: 平成25年度子ども・若者白書

直近で14.2%程度

特別支援学校等の児童生徒の増加の状況(H23→R3)

- 直近10年間で義務教育段階の児童生徒数は1割減少する一方で、特別支援教育を受ける児童生徒数はほぼ倍増。
- 特に特別支援学級(2.1倍)、通級による指導(2.0倍)の増加が顕著。



発達障害の一次障害とは？

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 植木田潤 二次障害の理解と対応 一部改変

発達障害の子どもたちに対して、親や教師は、不適切な対応をしてしまう可能性がある

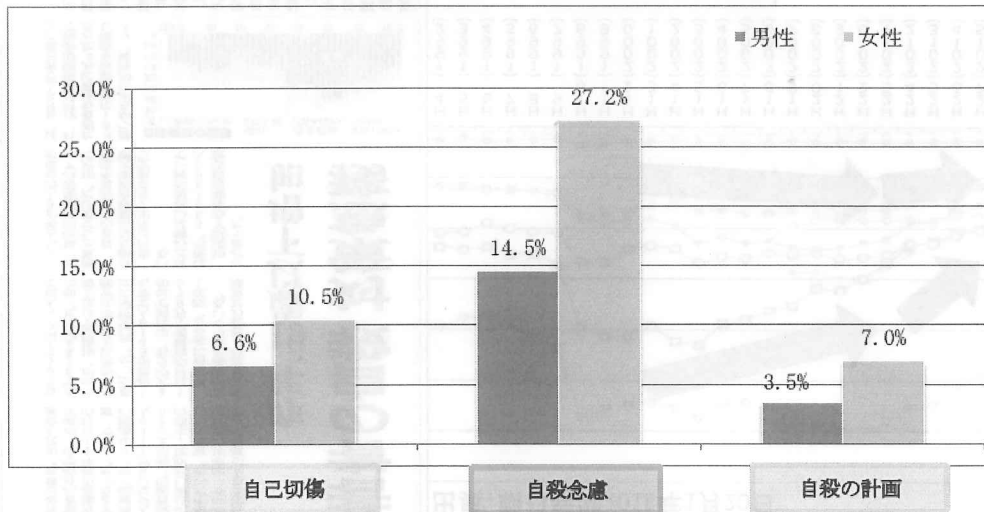
- ⇒否定的な評価や叱責等の不適切な対応が積み重なると否定的な自己イメージをもったり自尊心が低下したりする
- ⇒そのことによって、情緒の不安定、反抗的な行動、深刻な不適応の状態等を招くことがある

- ◆発達障害が原因であるが、その結果が新たな原因となる。
原因⇒結果(原因)⇒結果 の循環になることも多い。
原因：人に関心を持ってない⇒結果：育て難い(原因)
⇒結果：不適切養育
(仮説化する：家族・当事者と共有する)

発達障害からみた不登校

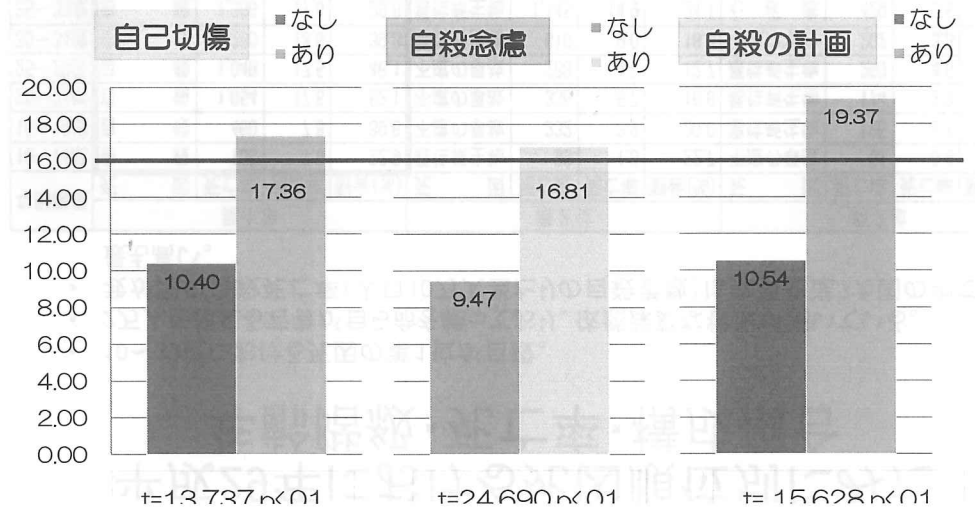
様々な発達障害において一定の割合で不登校の児童生徒が含まれていることが分かるが、特に、学習障害のある子どもの不登校の頻度が比較的高くなっている。⇒ 学習支援

自殺関連行動(2010年中学生調査)



全てに「あり」は、2.1%

抑うつ傾向 - 自殺関連行動について



年齢階級別(10歳階級)の自殺者数の推移

若者の自殺対策急務

昨年、19歳以下増加

自殺者数の推移 初の最多 2万1140人 (2023年)

過去最多 2万1140人 (2023年)

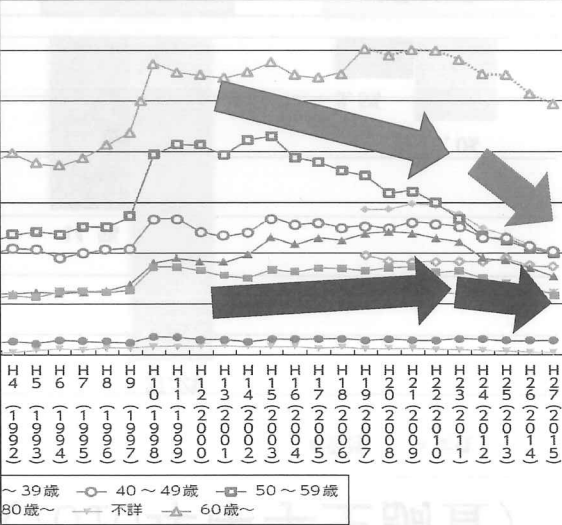
初年 3万5千人 (1987年)

19歳以下の自殺者数は、2023年10月までの累計で、前年(2022年)の1万9千9百99人から、1万1千1百11人(約55%)増加した。10歳以下は、前年(2022年)の1千1百11人から、1千1百11人(約100%)増加した。

10歳以下は、前年(2022年)の1千1百11人から、1千1百11人(約100%)増加した。

10歳以下は、前年(2022年)の1千1百11人から、1千1百11人(約100%)増加した。

出典: 朝日新聞2018年1月20日



計原票改正以降は「60～69歳」「70～79歳」「80歳以上」に細分化された。
資料: 警察庁「自殺統計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

引用; 平成28年度版自殺対策白書: <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/16/index.html>

平成29年における死因順位別にみた年齢階級・死亡率・構成割合

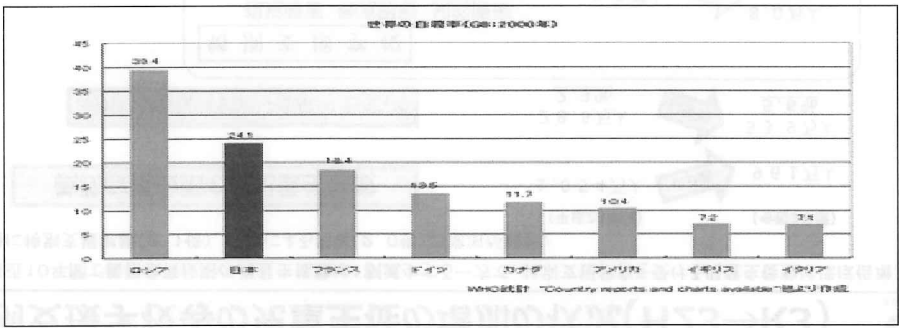
- 10～39歳における死因の第1位が自殺。
- 2万人を超える若者が自ら命を絶っており、依然深刻な状況が続いている。
- 我が国の自殺死亡率(人口10万人当たりの自殺者数)は主要先進7カ国の中で最も高い。

年齢階級	第1位				第2位				第3位			
	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)
10～14歳	自殺	100	1.9	22.9	悪性新生物	99	1.8	22.7	不慮の事故	51	0.9	11.7
15～19歳	自殺	460	7.8	39.6	不慮の事故	232	3.9	20.0	悪性新生物	125	2.1	10.8
20～24歳	自殺	1,054	17.8	52.1	不慮の事故	335	5.7	16.6	悪性新生物	174	2.9	8.6
25～29歳	自殺	1,049	17.5	46.1	不慮の事故	288	4.8	12.7	悪性新生物	269	4.5	11.8
30～34歳	自殺	1,280	18.6	39.3	悪性新生物	616	9.0	18.9	不慮の事故	262	3.8	8.1
35～39歳	自殺	1,366	17.8	28.8	悪性新生物	1,145	14.9	24.1	心疾患	429	5.6	9.0
40～44歳	悪性新生物	2,649	28.5	30.0	自殺	1,628	17.5	18.5	心疾患	991	10.7	11.2
45～49歳	悪性新生物	4,764	51.2	34.0	自殺	1,872	20.1	13.4	心疾患	1,769	19.0	12.6
50～54歳	悪性新生物	7,267	90.5	38.1	心疾患	2,393	29.8	12.6	自殺	1,830	22.8	9.6
55～59歳	悪性新生物	12,211	162.7	44.4	心疾患	3,377	45.0	12.3	脳血管疾患	2,022	26.9	7.3
60～64歳	悪性新生物	21,238	274.5	47.3	心疾患	5,424	70.1	12.1	脳血管疾患	3,147	40.7	7.0

厚生労働省HP「自殺対策についてー我が国の自殺の現状」より
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/sesakugaiyou.html

こころの健康なくして、健康なし No health without mental health WHO 2001

- 毎年世界中で2000万人が自殺を企図し、100万人が死亡している
- 先進諸国の中では最も自殺者が多く、10万人当たりの自殺者数は24.0人(自殺率)である。これは、米国の約2.1倍、英国の3.7倍となっている(出典:2010年WHOデータ)



3つの調査

- 2006に、川上、竹島らによって行われた「地域疫学調査による「ひきこもり」の実態と精神医学的診断についてー平成14年度～平成17年度のもまとめー」(厚生科学研究) ⇒ 約26万世帯
- 2010に、高塚、吉川らによって行われた「若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査)」(内閣府調査) ⇒ 約70万人 ⇒ 第2次調査(2016)では、約54万人(準+狭=広義) ⇒ 更に2018内閣府調査で、40歳～64歳では、約61万人(準+狭=広義)
- 直近の調査では、約146万人(2023 内閣府) ・コロナで増 / 主婦層のひきこもりも調査

ひきこもり70万人

半年以上家にこもり、ひきこもりの若者は、全国に推計で69万6千人いると内閣府が公表した。閉じこもって外に出ないの気持ちがある「なご」とする人も155万人に上った。

15歳以下若者以下の5万人を対象に2月に調査した。調査が訪問して調査員を届け、再び訪ねて回収し取ってきた約3300人の回答を分析した。

ほとんど家を出ないひきこもりは0.61%。趣味の用事の時だけ外出するひきこもりも1.19%。対象年齢の内閣府推計

年齢の人口3880万人をもとに推計すると、それぞれ29万6千人、46万人となった。ひきこもりに共感を示すグループも、90%を占めた。ひきこもりは男性が60%、始まった時期は10代が3割強だったが、30代も割合以上を占めた。きっかけを複数回答で尋ねると、職場になじめなかったこと、就職活動がうまくいかなかったことが合わせて44%に上った。一方、共感を示すグループは女性のが63%。「生きるのが苦しいと感じることがある」なく、うつ傾向や暴力傾向がみられた。

出典: 朝日新聞2010年7月24日